

『どん底に大地あり』

聖パウロ修道会 大阪修道院 阿部真理

『どん底に大地あり』。皆さん、この言葉を覚えておられるでしょうか？ 昨年春から秋に、NHK朝の連続ドラマ『エール』の「主人公」、福島出身の名作曲家、古関裕而の生涯のドラマが放映されました。そのドラマの主人公である古山雄一（古関裕而）が、『長崎の鐘』を作曲するにあたって、長崎の如己堂で「永井隆」に出会い、病床に伏す彼から頂いた言葉です。

古山が、永井隆に頂いたこの言葉『どん底に大地あり』は、私の心に今でもしっかりと残っています。まさに、今の時代に必要な言葉ではないかと思ったからです。

ここ何年も、NHKの朝ドラを見ることは無かったのですが、私の出身の福島市に生まれた、古関裕而の生涯のドラマ化が決定した時から心待ちにしていました。感動と涙と感謝、いろいろな思いで見ることが出来ました。改めて、古関裕而を誇りに思いました。

また、偶然にも、昨年12月末に、サンパウロから『平和の使徒 永井隆のこぼれ』という本が、発行されました。私の中の永井隆への思いが冷めないうちにこの本が出来るとは…。何か、運命を感じました。

私は、永井隆のこの言葉が、今の時代には必要だと感じています。今、世界中が新型コロナウイルス感染症に苦しめられ、人類は、まれにない困難に陥っています。その困難の中で、私たちの信仰が、生き方が、全てが試されているように思います。今まで当たり前であったものが、感謝しなければならない大切なものであったこと。衣食住、全ては、自分ではなく、神さまからの恵みであり、自分で得た物ではなく、周りの人々の働きの上にあったこと。などなど。

今回の苦しみは、私たち人類が自ら生み出したものとも言えるでしょう。永井隆が病床にありながらも、畳2畳の如己堂で、平和を叫びながら神に祈りを捧げたこと。自分の喜び、自分の平和ではなく、一人一人が神さまによって作られたものであり、大切な命であること。長崎で被爆し、人間のどん底を味わった永井隆の心の叫び、『どん底に大地あり』。

私たちは、今回の苦しみを通して、何が神さまのみ旨かを改めて問い直さなければなりません。自分の喜びだけではなく、互いを思いやる心、本当の平和を愛する心を問われているのだと思います。うわべだけの平和ではなく、神の国の平和を。

「どん底に大地あり。どん底まで落ちて、そこから立ち上がることが出来たのは、

この希望をしっかりと持っていたからである」

『花咲く丘』より

「丸裸より強いものはない。どん底より安心なところはない。

昇る方向だけあって、降りることは出来ないからである」

『いとし子よ』より

「貧しさの極まった、どん底の暮らしの中に、

もっともすばらしい清らかさがあります。」

『如己堂随筆』より

最後に、いつくしみ深い主イエスに祈ります。この感染症によって亡くなられたすべての人々、特に、愛する人に看取られずに亡くなられた方々が、あなたの御許で永遠の安息に与ることが出来ますように。また、今、病の苦しみの中にある人には、癒しの恵みを、そしてそれを支える医療従事者には、力と慰め、励ましを与えてくださいますように。